

インフラストラクチャの政治を分析するために ——近代性への信憑を支える基盤への問い——

植田 剛史

愛知大学の植田と申します。私は、愛知大学人文社会学研究所の所員と「社会と基盤」研究会のメンバーとを、両方兼ねているということがありまして、まず、今日遠くから来ていただいたゲストの方々にお礼を申し上げます。もうひとつは、こういったチャレンジングな企画をお認めいただきまして、いろいろとサポートをいただきました人文社会学研究所に、「社会と基盤」研究会のメンバーとして、あらためてお礼を申し上げます。

本日はこの後、私の方で司会も務めさせていただきますが、時間も限られていますので、さっそく内容に入りたいと思います。「インフラストラクチャの政治を分析するために」というタイトルで、話を進めさせていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

はじめに

まず、このワークショップの趣旨に関しまして、私の方から若干の説明をさせていただきます。「マテリアリティの政治と『インフラ論的転回』——社会の近代性を支えるヒト・モノへの問い」と題して、今回のワークショップを企画いたしました。人文社会学研究所の設立の経緯や趣旨は、伊東先生の開催挨拶でもご説明がありましたけれども、これまでの学問がいったい何を自明視してきたのか、そのことは結局何に棹差すことになるのかといった、学知の政治性も含めて、学問の成り立ちや効果を再帰的に問い直していくという点は、昨年開催された人文社会学研究所の開設記念シンポジウム¹でも、まさに試みられていたことだと思えます。こうした問題についてさらに深めていくうえで付け加える視角として、このワークショップでは「ヒト・モノ」というものを掲げました。人文学あるいは社会科学の対象としてこれまで前提にされてきたものは、基本的には、人間から成る社会、人間にとっての世界、あるいは人間が創り出してきたものであったと思えます。アプローチも力点の置き方も様々だけれども、そこでは基本的に、人間というものが関心の中心に置かれてきたわけです。しかし、人間の世界や人間の社会は、これまで人文学あるいは社会科学が想定してきたほどには、それとして完結していないのではないかと。だとしたら、こうした前提を自明視することで見えなくなっているものがあるのではないかと。あるいは、そのことが人文学や社会科学の知をさまざまに限界付けているのではないかと。このあたりをもう一度考え直しながら、人間だけではなくて、ヒトとモノとを両方を射程に含めることのできるような知のあり方を考えていくことができないかというのが、今回のワークショップの一番広いテーマになろうかと思えます。モノの持つ力も含めた形で「問い」を立てられるような、そういった知の形とは何なのかということ、学際的に、また領域横断的に考えることができればということで、この企画を考えた次第です。したがって、

¹ 愛知大学人文社会学研究所編，2016，『人文知の再生に向けて』（愛知大学人文社会学研究所開設記念シンポジウム報告書），愛知大学人文社会学研究所。

今日のゲストも、私は社会学が専門ですけれども、もちろんそこに限定をせずに、哲学がご専門の方、あるいは人類学がご専門の方も含めてお呼びしておりますので、そうした議論の場にできればと考えております。

東日本大震災と近代性の信憑の〈危機〉1：東京の経験から

このようなワークショップのテーマを構想したきっかけ、その出発点としましては、やはり5年前の東日本大震災の経験があるということです。マテリアリティの問題、あるいはヒトとモノといった問題を、あらためて考えなければならないと我々が思い知らされた出来事が、この震災だったわけですね。

まず、2つのエピソードから話を始めていきたいと思いますが、ひとつは、東日本大震災のときに、東京で何が起きていたのかということです。東北の問題、あるいは福島の問題については、この間いろいろな形で報道がなされたり、研究が積み重ねられたりしてきたかと思えますけれども、あのときの東京がどうであったのかということは、意外と語られていないように思います。5年経って、記憶が薄れつつある部分もありますので、少し振り返ってみたいと思います。

東日本大震災のときの東京の震度自体は、最大で震度5強ほどであったわけですが、人的な被害ですとか、モノが壊れるといったことは、そこまで深刻な形では起きてはいなかったんですね。地震が起きた当日の3月11日は、電車が止まるとか、帰宅困難者が発生するといった混乱はありましたけれども、それも一晩くらいでいたい解消して行って、翌3月12日には、だんだんと落ち着きを取り戻していったように見えました。東京だけを見ていると、少なくともそう見えたわけです。しかし、その後3月14日以降になって、東京はよりいっそう混乱していくことになるわけです。もちろん、スーパーやコンビニから商品がなくなるといったことは地震の当日から起きてはいましたけれども、東京が本当に混乱し始めるのは、計画停電が始まった3月14日以降であったと思います。電車が間引き運転になって移動にかかる時間が読めなくなったり、仕事のスケジュールが立たなくなったり、あるいは、エスカレーターが止まって、電気や信号が全部消えて真っ暗になってしまった街の景色に出会って、我々は今までにないような経験をするようになったわけです。それが3月14日以降、しばらく続くわけですがけれども、さらに混乱に拍車をかける形で起きたのが水道水への放射性物質の混入で、それが発表されたのが、たしか3月23日です。特にお子さんがいる家庭なんかは、水をどのようにするかをめぐって、いろいろ大変なことがあったと聞いていますし、区役所の職員がペットボトルを戸別に配って回るなんていうこともありました。あるいはこの頃には、都内でホットスポットが次々に発見されるようになったこともあって、いろいろな場所をガイガーカウンターで測ってまわるといったことが、行政によって行われることもあれば、市民によって自発的に行われることもあったかと思えます。こうして、電力が不安定であることに加えて、水をそもそも飲んでよいのか、シャワーを浴びてよいのか、手を洗ってよいのかといったことまでもが怪しくなってくるようななかで生活をしなければいけないということ、東京ではずっと強いられていたわけです。

東京でも、たしかに何人が亡くなった方はいましたけれども、でも、東北に比べたら数としては非常に少なかった。さらに、モノが壊れたかといったら、たしかにスーパーの駐車場が壊れたりホール天井が落ちたりといったことはありましたけれども、でも、モノ自体はそんなに大きくは壊れていなかった。にもかかわらず、東京の生活というのは、当時、ズタボロになっていたということを経験しています。今まで日常的に行ってきたことのいちいちについて、

本当に大丈夫なのか、できるのか、どうなのかっていうのを、不安に思いながら、あるいは確かめながら、でも確かめたところで必ずしも答えが得られないなかで生活をしていかなければならないということを強いられ、しかも、その判断がいろいろと分かれているにもかかわらず、それを議論できないような空気が醸成され、自分の判断を信じられるかどうか分からないなかで、手探りで生活をしていかなければならないというのが、東京で起きていたことのように思います。たしかにモノは壊れていないし、人もあまり亡くなっていなかったけれども、東京の日常生活は完全に崩壊の危機に瀕していたと、当時のことを振り返れば、言っていざらうと思います。

東日本大震災と近代性の信憑の〈危機〉2： 田老の経験から

もうひとつお話ししたいのは、岩手県の宮古市にある田老というところの例です。以前は田老町でしたが、今は宮古市に編入されて田老地区となっています。ここは津波の常襲地帯で、明治三陸大津波でも甚大な被害が出た場所です。ですので、それをきっかけにしながら、この地域では、防災まちづくりが非常に強く進められてきていたということがあって、「津波防災のまちづくり宣言」の碑なども建っています。たとえば、津波を防ぐための防潮堤を築いていくというだけではなく、それでも津波が来たときに逃げやすいように、街の十字路の角を切っていくといったような試みもなされていた、そういった蓄積のあるところでした。その田老で、今回どのようなことが起きたのかという話です。

田老では、明治以降、津波防災のインフラ整備をしていくなかで、「万里の長城」などとも呼ばれた、非常に大きな防潮堤が整備されてきました。震災前には、高さ 10m で総延長が 2433m の X 字型の防潮堤が街を囲う、そういう状態になっていました。しかし、皆さんご存知のとおり、津波はこの防潮堤を乗り越えて、乗り越えただけではなく破壊し、街を洗い流してしまっ、今回も非常に甚大な被害が出たということがあります。写真 1 は、防潮堤の X 字のちょうどクロスしていた部分に登って撮ったものですが、奥にコンクリートの塊のようなものが 3 つ 4 つ並んで見えるのが、防潮堤が破壊された跡になります。堤防の内側にはずっと建物が並んでいましたが、津波で流されて、これは 2015 年 3 月に撮ったものですが、このよ



写真1 宮古市田老の被災した防潮堤
撮影：植田剛史(2015年3月2日)。

うな状態になっているということです。田老観光ホテルが写真の奥に映っていますが、窓が抜けているところが4階ほどの高さになりますから、それくらいの高さまで波が来ていたということです。

このように田老では、防潮堤が破壊され、街が津波に飲み込まれ、今まで築いてきた防災インフラが破壊されて再び壊滅的な被害が起きたわけです。しかし、にもかかわらず、住民の方たちが今まで築いてきた防災インフラへの信頼自体を完全に失ってしまったかという点、必ずしもそうではなくて、なかには「防潮堤がなかったら、山の方に逃げても助からなかっただろう」ということをおっしゃる方もいるわけです。もちろん現地には他にもいろいろな意見があって、このようにおっしゃる方だけではなく、防潮堤に対する信頼に疑義を呈する意見もいっぱいあるのだらうと思います。それは田老だけの話ではなくて、津波被災地の多くで、そういう議論が闘われているものだと思います。しかし、見解の相違があって、いろいろな議論があるにもかかわらず、多くの津波被災地では、やはり、なんだかんだで、これまで以上に高い防潮堤が再建されている。いろいろな意見はあるけれども、最終的には結局、近代的なテクノロジーでもって、インフラでもって、津波とか自然災害をどうにかしていこうというところの発想自体は、やはりずっと残り続けていて、それは必ずしも今回の地震や津波によって破壊しつくされてはいないということがあるわけです。

近代性への信憑を支える基盤への問い

この2つのエピソードから、少し話を展開させていきたいと思います。この東京と田老の経験から、いったい何を浮かび上がらせることができるのかということところです。東京の経験から浮かび上がるのは、近代社会がいかにモノの論理に振り回されているのか、ということになるかと思います。そもそも、人間の論理、あるいは近代的な理屈を担保するために、都市の基盤であるとか、いろいろなモノが整備されてきたはずであったにもかかわらず、一度それが崩壊すると、崩壊しないまでもうまくいかない部分が出てくると、今度はそのモノの論理によって生活が本当に規定されて、モノの論理を無視しては動けない状態が生じてくるということです。これが、ひとつ言えることであろうと思います。しかし、モノだけが問題だったかという点、そうではなくて、モノの問題だけには完全に還元してしまいうことができないというのが、もう一方で、田老の事例から浮かび上がってくることです。田老の場合は、モノは完全に破壊しつくされてしまったけれども、しかしそこには、なお残った信頼の感覚のようなものもあるということです。ここから考えるべきことは、モノの問題だけでなく社会の問題だけでなく、モノを介して担保されてきたような近代社会の信憑の問題なのであるということだと思います。東日本大震災のもとで危機に瀕していたものは、本当は何であったのかということ振り返ると、モノが壊れた、あるいは人命が失われたという問題だけではなくて、社会の近代性自体に対する信憑が危機に瀕していたのではないかと思われるわけです。そして、この信憑自体がどのようにモノによって支えられてきたのかということに迫りうるような「問い」の必要性というものが、この2つのエピソードから引き出せるのではないかということです。

そもそも近代社会というのは、合理性とか予測可能性とか計算可能性を徹底的に追求するというをやってきた社会で、そのことは、これまでも社会学がいろんな角度から明らかにしてきたことでもあると思います。Max Weber であれ、Karl Marx であれ、こういうことを、たとえば官僚制の問題、資本主義の問題などとして、扱ってきたんだらうと思います。ただ、そこには、近代性自体を支える暗黙の前提として、近代性それ自体への信憑があるのではないかということ、まず、考える必要があるのだらうということなんです。しかし、近代社会の背後に

実はそれを支える信憑がある、そうした暗黙の前提があるという議論だけであれば、これもおそらく、社会学がこれまで考えてきたことから、そこまで離れてはいないのだろうと思います。たとえば、契約の前提としての儀礼という問題、つまり契約を守るという暗黙の契約がどのように可能かという、それは反復的で儀礼的なものによって担保されているといったような議論であれば、それは昔から、おそらく Émile Durkheim の頃から、ある意味あったわけです。今回の東日本大震災の経験からさらに深められることがあるとしたら、その近代社会の信憑を担保している次元として、マテリアルな次元があるのではないかという、その部分だろうと思います。近代社会を支えているのは、反復だとか儀礼だとかだけではなくて、モノがそこにあること、あるいはモノが安定的にその形を成していること、あるいは動いているということ、こうした部分に支えられている信憑の基盤というものがあるのではないかということです。そういうわけで、近代社会の信憑を支えているヒト・モノの組み合わせ、集合体を問う必要があるのではないか、その次元に切り込めるような「問い」が出せなければいけないのではないかということ、ひとつ考えていきたいわけです。これが、このワークショップを企画した最初の出発点としてあるわけですね。

インフラストラクチュアの政治のアクチュアリティ

では、なぜ今、こうした「問い」を出すことが必要なのか、そのアクチュアリティはどこにあるのか、というところに話を進めたいと思います。

東日本大震災が発生してより、この間、近代社会の信憑を支えるヒト・モノのあり方をめぐって、さまざまな力のせめぎあい起きてるように思います。これを、この報告では一言で、インフラストラクチュアの政治と称しておきます。このインフラストラクチュアの政治というものを、仮に理論的な対象として設定したとしたら、何か見えてくるものがあるのではないかと。特に、東日本大震災以降の日本社会の「転換」というか、変化の部分に迫る視角として、今、かなり切迫性をもっている見方ではないかと考えているわけです。「転換」というところに括弧がついているのは、もちろん震災研究がこれまでも指摘してきたように、震災によって全てが新しく変わったわけではなくて、むしろ今まであったものが震災を機に加速したり浮上したりしてきているということがありますので、切断面だけが全てではないということへの留保で、括弧をつけています。

このインフラストラクチュアの政治について、今あらためて問うことの意味を考えるにあたって、東日本大震災の前に、このような日常性の切断がいつ起きたのかを振り返ってみたいと思います。海外に眼を向けると 9.11 などいろいろありますが、日本社会に限定するならば、たとえば阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件が起きたのが 1995 年で、直近の経験としては、やはりこれが深刻なもととしてあったように思います。その後の日本社会で何が起きてきたかということ、よく指摘されるとおり、いわゆる新自由主義的な動きが一気に席卷していくということがあったわけです。こうした動きが、なぜあれほどまでに滑らかに受け入れられていったのか、そこにはどのような経験的な土台があったのかということを見ると、やはり、「本当に危機的な状況に直面している」だから「とにかくこのままではまずい」ということを、多くの人が実感するような、そういった出来事があったのではないかと思うわけです。では仮に、東日本大震災で経験された日常性の切断が、何かそういった機能をこれから果たしていくのだとしたら、この後いったい何が来るのか。こういった問題を考える必要があるし、その動きが受容される現実的な土台としてこの切断の経験が作用していく可能性について、考えなければいけないと思うわけです。

こうした問題を考えるにあたって、インフラストラクチャの政治というものは、視角として結構有効なのではないかと思っています。たとえば、この5年間でどういったことが起きてきたかという、防潮堤の再建を含め、国土強靱化法のもとでいろいろなインフラ整備がもう一度進められていたり、オリンピック計画とも連動して東京の都市再編が進められたり、あるいは原発をも含めたインフラ輸出がさらに促進されていたり、機密保護法から武器輸出制限の緩和から安全保障関連法に至るまでのセキュリティ政策の変化があったり、他方で、それらに対するストリートレベルでの抗議が活発化したり、といったことがありました。こうした大きな動きを総体として捉えていくための視角として、インフラストラクチャ、あるいは近代性への信憑を掛け金にした政治というものを考えていくことができるのではないかということ、アイデアとして持っているわけです。もちろん、これは仮説的なものですので、これが何か正解だということではなくて、ひとつのたたき台として考えられないかということです。ただ、いったい、どのようにしたらそれを捉えることができ、理論的に深めていくことができるのか。あるいは、そもそも、そういったことが可能な理論などあり得るのかということ自体は、それとして考えなければいけないし、今日のテーマのひとつでもあろうとも思っています。こうした問題を考えていくときに、まず、都市研究における *assemblage* アプローチを、ひとつのたたき台にしてはどうかというのが、この報告の後半の内容になっています。

都市研究における *Assemblage* アプローチとインフラ研究

もう時間が迫っていますので、少しスピードを上げたいと思いますけれども、都市研究において近年出てきているアプローチに、*assemblage* アプローチというものがあります。日本ではまだあまり導入されていませんが、海外ではここ数十年くらい議論されてきたものです。どういふものかといいますと、Bruno Latour や Michel Callon らによる Actor Network Theory を都市研究に応用していくという発想から出てきたもので、都市というものを、都市的なものを構成している要素の集合体として、*urban assemblage* として、捉え直していくというアプローチで、既にいくつか本²も出ています。こうした観点からの研究のなかに、Stephan Graham らのインフラストラクチャ研究³もあるわけですが、彼らの研究によると、都市の日常性はインフラストラクチャによって支えられているけれども、それは普段は不可視化されているのだというわけです。しかしそれは、災害とかテロとか、あるいは戦争といった契機によって、可視化されていく。そういったところに注目することで、つまり、インフラストラクチャから逆に都市とか日常の成り立ちに迫っていくことができるという、そういうアプローチが提唱されています。これが現在、「インフラ論的転回」といった言い方で、都市研究のなかでも市民権を得始めているところがあります。都市はもともとインフラストラクチャの塊ですから、都市研究においてこうしたアプローチが出てくるのは理由のあることであろうと思いますが、これが、今回我々が考えていきたいインフラストラクチャの政治に迫っていくための最初の一步として、有効なのではないかと考えているわけです。

² Fariás, Ignacio and Thomas Bender eds., 2009, *Urban Assemblages: How Actor-Network Theory Changes Urban Studies*, Abingdon: Routledge; McFarlane, Colin, 2011b, *Learning the City: Knowledge and Translocal Assemblage*, Chichester: Wiley-Blackwell.

³ Graham, Stephen and Simon Marvin, 2001, *Splintering Urbanism: Networked Infrastructures, Technological Mobilities and the Urban Condition*, Abingdon: Routledge; Graham, Stephen, 2010, "When Infrastructures Fail", Stephan Graham ed., *Disrupted Cities: When Infrastructure Fails*, New York: Routledge, 1-26.

こうしたアプローチに対しては、もちろん、これまでの都市研究から、たとえば政治経済学的アプローチから批判があるわけで、そうした論文⁴なども既にいくつかあります。ですので、それをふまえたうえで、先ほど申し上げたようなインフラストラクチャの政治、社会の近代性への信憑を掛け金とした政治の分析に、この *assemblage* アプローチをいかに接続していくことができるのかというのが、ひとつの課題になってくると思っています。そして、こうした課題に取り組むうえでは、*assemblage* アプローチの発想を、都市というもののあり方を左右するような力の分析へと、いかに結びつけていけるのかということが、おそらく鍵になるのではないかと考えています。

では、都市というもののあり方を決定する力について、*assemblage* アプローチがどのように考えているのかということ、そこでは様々な構成要素からなる集合体として都市なるものを捉えますので、新たな要素が出現したり、そのことが識別されたりすることを起点として、*urban assemblage* の組み替えが連鎖的に引き起こされていくと見るわけです。つまり、この場合、その組み換えがどう起こるのかということに、事態を変化させていく力が所在しているということになるのだらうと思います。ただ、あらためて考え直してみると、この組み換えを、*assemblage* アプローチで想定されているほどに偶発的なものとして考えてよいのかといえば、おそらくそうではないだらうと。しかし、かといって、これまでの政治経済学的なアプローチで前提されていたように、初期条件としての構成要素の配分というか、政治経済的な構造によって、組み換えの結果が完全に規定されるのかということ、おそらくそうでもないわけで、実際は、その間にあるだらうと思われるわけです。このとき、構成要素の組み換えを水路付けていくような力がいったいどのように作動していくのかということ、*urban assemblage* のなかに分け入って見ていくということが、都市のあり方を左右する力の分析へと *assemblage* アプローチを接続するうえで、おそらく重要になるのだらうと考えています。

このように考えると、*urban assemblage* に何が新しい構成要素として加わったのかとか、新しい構成要素がいかなる変化を引き起こしているのかということについて、*urban assemblage* 内在的に診断したり識別したりすることが可能な構成要素が、理論的にはクリティカルな位置を占めるのではないかということ、アイディアとしては持っています。その点で、たとえばインフラストラクチャに関するいろいろな専門知識などは、*urban assemblage* を構成する要素のなかでも、特殊な位置を占めるのではないかということ、を思うわけです。こういった部分に注目して分析していくことが、*assemblage* アプローチの発想を、都市のあり方を左右する力の分析に結び付けていくやり方として、ありうるのではないかということ、今のところは考えています。

おわりに

これ以上続けると時間をオーバーしますので、報告はいったんここで止めまして、最後に、このワークショップの成り立ち自体について、来場して下さった方々に向けて、少しご説明申し上げたいと思います。今ここに座っているメンバー、特に報告者につきましては、今日に至るまでに何回か会って議論を重ねてきたメンバーでもあります。「社会と基盤」研究会は、2011年にスタートしましたが、その活動のなかで、インフラストラクチャに関する理

⁴ Brenner, Neil, David J. Madden and David Wachsmuth, 2012, "Assemblage, Actor-Networks and the Challenges of Critical Urban Theory," Neil Brenner, Peter Marcuse and Margit Mayer eds., *Cities for People, Not for Profit: Critical Urban Theory and the Right to the City*, Abingdon: Routledge, 117-137; Storper, Michael and Allen Scott, 2016, "Current Debates in Urban Theory: A Critical Assessment," *Urban Studies*, 53(6): 1114-1136.

論的な検討を重ねて参りました。その中間的な議論の場として、2013年から2014年にかけて一橋大学においてワークショップを開催しました。そして、そのときのメンバーが中心となって、「社会と基盤」研究会の英文ジャーナルである *Disaster, Infrastructure and Society (DIS)* の No. 6 において、**Infrastructure Politics** という特集企画に取り組んできたという経緯があります。

この特集企画には、いくつか大きな切り口がありますが、そのひとつが、マテリアルと社会的なものの接続をどう考えるのか、あるいは、そこで統治性の問題をどう考えるのかという点です。今日の報告のなかでは、歴史社会学がご専門ですけれども、ガラスについての研究をしておられる西川純司さんのご報告が、その部分に一番関連が深いものと思います。もちろん、インフラストラクチャをめぐる政治や統治の問題は、以前から都市研究のなかでも深められてきたということがあります。その点については、今日は岩館豊さんが、西川さんのご報告を受ける形で、特に **Manuel Castells** の議論を参照しながらご報告をされると思います。都市社会学者と、ここではご紹介しておきたいと思います。

もうひとつの切り口は、さきほど専門知識への着目が鍵になるのではないかというようなことを私の報告の最後の方で申し上げましたけれども、これとも関連しています。東日本大震災のような危機的な状況のもとでは、今いったい何が起きているのかを定義したり識別したりする知識は大きな力を持っていたように思いますし、こうした機能をこれまで意味独占的に担ってきた科学的な知識は、とりわけ特権的な位置を占めてきたわけです。しかし、こうした知のあり方自体が、いろいろな歪みだとか問題を持っているということについて、*DIS* のなかでは、森元齋さんが、哲学がご専門ですけれども、**Alfred North Whitehead** に依拠しながら議論を展開してくださっています。

次に、森啓輔さんですけれども、沖縄研究、とりわけ基地の問題を専門にしておられます。東日本大震災のときには、救助のために自衛隊が大展開する景色というものが現れたことは、ご記憶の方も多いと思います。インフラストラクチャというものは、近代社会のインフラストラクチャでもあるけれど、同時に、国民国家のインフラストラクチャでもあるわけです。近代社会のインフラストラクチャが本当に危機に瀕したときには、軍事的なものが一気に姿を現してくる、国家のむき出しの力が現れてくるということ、我々は眼にしてきたわけですが、こうした観点からインフラストラクチャをどう考えるのかということについて、今日は森啓輔さんにご報告を頂きたいと思っています。

また今日は、コメンテーターとして、都市社会学・地域社会学を専門とされている三浦倫平さんと、人類学がご専門の難波美芸さんにもお越しいただいています。今回の *DIS* の特集企画を出発点としながら、お二人からのコメントをいただきまして、さらにその先へと議論を深めていけたらと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

少し時間をオーバーしてしまいましたけれども、これで導入の報告を終わらせていただいて、このまま西川さんの基調報告と岩館さんの報告に移りたいと思います。